

『延慶本平家物語』

に於ける「ゲンス」と
「アラハス」の表記について

柚 木 靖 史

はじめに

本邦の古典作品中に認められる漢語サ変動詞の中には、和語動詞と類義の関係を成している語がある。本稿で取り上げる「現ス」と「アラハス」「アラハル」も、そのうちの一つである。これら「現ス」「アラハス」「アラハル」の意味的関係については、先に拙稿で述べたところである。¹⁾ここで、その結論を要すれば、次のようになる。

(1) 「現ス」と「アラハス」「アラハル」の間には意味上の差異が認められる。

(2) 「現ス」が、仏教と関係する場面のみ使用されるのに対し、「アラハス」「アラハル」には、このような制約が無い。

(3) 「現ス」は、「佛の姿」などの可視的な対象に限って

使用されるが、「アラハス」「アラハル」は、「心の内」など実際に見ることができない対象にも使用される。

(4) 「現ス」の意味は、「仏教的有情物・無情物が、ある形となって、見えるようになる」と「仏教的有情物が、仏教的無情物を、ある形にして、見えるようにする」である。

(5) 「アラハス」の意味は、「不明明であつた有情物・無情物を、他人に知られるようにする」であり、「アラハル」の意味は、「不明明であつた有情物・無情物が、他人に知られるようになる」である。

さて、先の拙稿においては、「現ス」「アラハス」「アラハル」それぞれの意味を右のように結論づけたのであるが、解決すべきいくつかの課題が尚いくつか残っている。その一つに、「現」字で表記されたものを、「ゲンス」と読むか

「アラハス」と読むかという問題がある。この場合問題となる、読み方の不分明な表記例としては、「現テ」のように送り仮名が付されていない場合と、「現シテ」（連用形）「現ス」（終止形）「現セヨ」（命令形）のようにサ行変格活用とサ行四段活用の区別が送り仮名からは判断できない場合とがある。先の拙稿では、このような読み方の分からない例を、考察の対象から除外したのであるが、本稿では、表記の問題として、これらの例について追考することとする。本稿では、読み方の不分明な例が比較的多い『延慶本平家物語』を取り上げて考察を進めて行くこととする。

一、『延慶本平家物語』に於ける「現ス」の例

先ず、「ゲンス」⁽²⁾と読むか「アラハス」と読むかが、表記からは俄には判じることができない例を、『延慶本平家物語』⁽³⁾の中から抜き出して示すこととする。（以下に示す用例中の句読点や濁点は、私に施したものである。）

- ① 而今ハ態ト無縁貧道ノ僧ヲ供養セサセ給。清浄ノ御善根也。争カ有名無実ノ虚仮ノ相ヲバ現シ候ベキヤトテ四方興ヲ返シ進セ畢。（第一本 一三丁裏二行目）
- ② 凡ハ重盛ナドガ子供ニテアラム者ハ殿下ヲモ重ジ奉リ、

礼儀ヲモ存ジテコソ有ベキニ、無云甲斐「若キ者共召具シテ、加様ノ尾籠ヲ現シテ、父祖ノ悪名ヲ立ル不孝ノ至リ独リ汝ニアリ、トテ越前守ヲモ諫メラレケルトカヤ。（第一本 五八丁裏二行目）

- ③ 始ハ大津ノ東浦ニ現シ御テ、其ヨリ西ノ浦ニ移セ給テ、田仲ノ常世ガ船ニ召テ、辛崎ノ琴ノ御館、牛丸ガ許ヘ入セ給ニケリ。（第一本 八九丁裏十行目）

- ④ 一行無実ニヨリテ遠流之罪ヲ被ル事ヲ天道憐給テ、九曜ノ形ヲ現シテ守給フ。（第一本 一二丁表五行目）

- ⑤ 「太原ノ白居易、文集七十卷ヲ二部書テ、一部ヲ鉢塔院ノ宝蔵ニ納メ、一部ヲ巴南禪院ノ千仏堂ニ送奉リテ、其後件ノ文集ノ箱ヨリ光明ヲ現ル事度々也。（第一本 七八丁表八行目）

- ⑥ 両院ノ寺僧怪ヲ成テ、文集ノ箱ヲ開テ見所ニ、第六十ノ卷ニ発願ノ文アリ。其一二ノ文字ヨリ現ル所ノ光明也。（第一本 七八丁表一〇行目）

- ⑦ 其後京ヘ歸リ登テ、大師ノ老僧ニ現シテ被仰之旨、具ニ奏聞シケレバ、「巖島杜可造進」トテ、任ヲ延ラレテ、長任ノ国務トシテ、社ヲ造進シ給。（第二本 八丁裏九行目）

- ⑧（略）平家ハ徒ニ栄花ヲ一天ニ開テ、臆病ヲ宇治河ノ

畔ニ現ス。(略) (第二中 五七丁裏六行目)

⑨月ノ光クマナケレバ、終夜詠メテ居給ヘルニ、坪ノ内ニ、目一付タル物ノ、長ケ一丈二尺バカリナルモノ、現タリ。(第二中 一一五丁表七行目)

⑩(略) イカニ道理ヲ責レドモ、文学ガ状ヲ信用シ給ワヌ事ノアサマシサニ、信ヲモトラセ奉リ、法ヲモ悟ラセ給ヘカシトテ、方便ノ為ニ、小籠等ヲ招テ、風波ノ難ヲ現シテ候ツルゾ。(略) (第二末三三丁裏一〇行目)

⑪(略) 鳥羽殿ニ盗人ノ籠テ候シヲ、寄者一人モ候ワザリシニ、築地ヨリ登越テ、搦テ候シヨリ以来、保元平治ノ合戦ヲ初トシテ、大小事ニ一度モ君ヲ離レマイラセ候ワズ。又不覺ヲ現シタル事モ候ワズ。(略) (第二末 九八丁表一行目)

⑫多門天、持国天二人ノ童子、十羅刹女、十人ノ下僧ニ現シテ随逐給仕シ給フ。(第三本 四六丁表九行目)

⑬即是諸仏経行ノ地、釈迦弥勒ノ現處也。(第三本 四六丁裏三行目)

⑭本朝ノ弘法大師、天竺ノ釈迦如来、共ニ即身成仏ノ理証、眼ノ前ニ現セリ。(第三本 五三丁表九行目)

⑮弘法答テ宣ワク、『其人証ハ、遠ハ大日金剛薩埵、近

ク尋ヌレバ、我身即是ナリ』トテ、忝ク明時ノ龍顔ニ向ヒ奉リテ、手ニ密印ヲ結び、口ニ密語を誦シ、心ニ觀念ヲ凝シ、身ニ儀軌ヲ備ヘシカバ、生身ノ肉団忽ニ転ジテ、紫磨黄金ノ膚トナリ、出家ノイタ、キノ上ニ、自然ニ五仏ノ宝冠ヲ現ス。(第三本 五四丁裏七行目)

⑯彼辰旦国ニハ、玄宗皇帝ノ御宇ニ此天変現シテ、七日内ニ天下乱キ。(第三末 三三丁表七行目)

⑰行末モ今ハアヤフガル。天変ノ現シ様恐シトゾ。(第三末 六丁表二行目)

⑱観音ニ現メ葉樹王之身ヲ。寧不シ食セニ不老不死ノ之薬ヲ乎 (第三末 二六丁裏三行目)

⑲其中ニ惠光房津師、『抑此願書ノ趣、神慮ナヲモテハカリガタシ、願ハ権現其瑞相ヲ示シ給ベシ』トテ、山王ノ御宝前ニ捧テ、三日參籠シタリケルニ、願書ノ表紙ニ一首ノ歌現シタリ。(第三末 五五丁表七行目)

⑳摂政殿御出アリケルニ、法皇ノ御幸モナカリケレバ、御心中ニ思食煩ワセ給ケルニ、白髮ノ老翁、御車ノ前ニ現シテ、(第三末 七四丁裏一〇行目)

㉑忽ニ赴ニ弘暎之先路ニ、靈木有テ童ハ無シ。新ニ現シ満月之尊容ヲ。(第五末 四三丁表五行目)

㉒是故ニ月蓋長者ガ窓ノ前ニハ、現ニ除病之色像ニ、五

通菩薩ノ樹ノ上リニハ、顯^ミ来迎之聖容^ヲ。(第五末四
七丁表十行)

② 弥陀ハ無上念王ト申シトキ、宝海梵志ノ勸ニヨテ空王
仏ヲ拝シ、出家ノ形ヲ現シテ法藏此丘ト申キ。(第六
末 四九丁裏一〇行目)

右の例のうち、①②③④⑦⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓は、本文
中にいづれも「現シ」と表記されているため、「アラハシ」
か「ゲンジ」かを、判じられない例である。⑤⑥は、「現
ル」と表記されているために、「アラハセル」或いは「ア
ラハルル」か「ゲンスル」かを、判じられない例である。
⑧⑨⑩⑪⑫は、「現ス」と表記されているために、「アラハ
ス」か「ゲンス」かを、判じられない例である。⑬は、
送り仮名が記されていないために、読みを決定できない例
である。⑭の例は、「現セリ」とあるために、「アラハセ
リ」か「ゲンセリ」かを、判じられない例である。
『延慶本平家物語』では、この他に、送り仮名により、
「ゲン(現)ス」と読むことが明らかな例が、管見に入る
限り二例認められる。以下、その例を掲げる。

○サテ牛丸ガ船ニ乗給ヘバ、「イツチヘ渡ラセ御スヤラ

ム」ト、怪ミ見タテマツルホドニ、彼ノ庭前ノ大木ノ
梢ニゾ現セサセ給ケル。(第一本 九〇丁表九行目)
○観音ノ御変化ハ白馬ニ現セサセ給トカヤ、偏ニ是基康
ガ祈念感応シテ、観音ノ御利生ニテ都ヘハ帰リ上リニ
ケリ。(第一末 一〇三丁裏七行目)

右の例はいずれも、未然形の活用語尾が「セ」になって
おり、サ変動詞の未然形と合致している。従つて、これら
の例は、「ゲンス」(漢語サ変動詞)の例であることが明ら
かである。このように『延慶本平家物語』中には、「現」
字を「ゲンス」と読んだ確例が存する。(尚、これに対し
て、「現」字を「アラハス」と読んだ確例は、先に示した
ように『延慶本平家物語』中には見いだせない。)しかし
ながら、「ゲンス」の確例があるからといって、表記上か
ら「現」字の読みが判ぜられない例を、全て「ゲンス」の
例であると決定し処理してしまうのは、余りにも早計に過
ぎるであろう。したがって、次項では、「ゲンス」「アラハ
ス」の意味差を基準として、「現」字の読みについて考察
していくこととする。

二、『延慶本平家物語』に於ける「アラハス」の表記について

(1) 『延慶本平家物語』に於ける「アラハス」の表記例

『延慶本平家物語』に於いて「現」字を「ゲンス」と読むか「アラハス」と読むかについて考察する前に、ここでまず、「アラハス」という動詞が同文献中でどのように表記されているかについて示しておくこととする。『延慶本平家物語』に於いて、「アラハス」と読むであらうと思われるものを示すと次のようになる。

(1) 片仮名で表記された例

① 五月ヤミ名ヲアラハセル今夜哉(第二中 九〇丁裏四行目)

② 「生テ此事ヲ承ル、身ノ幸ニアラズヤ。忠ヲアラワシ、名ヲ止メムコト、此時ニアリ。」(第二末五三丁裏九行目)

③ 「朝敵三代コソ名ヲアラワス事恐レ有リツレ。(略)」(第三末 八二丁表一行目)

〔他に例あり。第三末 八二丁表三行目〕

(2) 「顯」字で表記された例

④ 祇園精舎ノ鐘ノ声、諸行無常ノ響アリ。沙羅双樹ノ花ノ色、盛者必衰ノ理ヲ顯ス。(第一本 九丁表三行目)

⑤ 同弟、薩摩平六家長トテ、歳十七ニナリケルガ、長高ク、骨太ニテ、カラオボヘ取テ、度々ハガネ顯ハシタル者アリケリ。(第一本一八丁表三行目)

⑥ サコソ重代ノ弓取ナラムカラニ、カヤウノ雲上交ニ、殿上人タル者ノ、腰刀ヲサシ顯ス事、先例ナシ。(第一本 二〇丁表七行目)

〔他に用例あり。第一本四二丁表八行目 同八六丁表二行目 同九三丁表六行目 第一末五六丁表二行目 同八九丁表八行目 同九五丁裏二行目 第二本三一丁表二行目 同六六丁表一行目 第二中一三三丁裏一行目 第二末二四丁裏一〇行目 同五四丁表五行目 同八九丁裏四行目 第三本三〇丁表四行目 同五四丁裏九行目 同五七丁表四行目 同五七丁表七行目 同五七丁表一〇行目 同五七丁裏二行目 同八八丁裏五行目 第三末九一丁表二行目 第五本六丁裏四行目 第五末三二丁裏一〇行目 同三九丁表九行目 同四四丁裏一〇行目 同四七丁表一〇行目 第六本五六丁裏四行目〕

(3) 「彰」字で表記された例

⑦ 遂ニ立⁽¹⁾新⁽²⁾功⁽³⁾ヲ、彰⁽⁴⁾譽⁽⁵⁾於四方ニ、奮⁽⁶⁾名⁽⁷⁾於百代ニ。

(第二末 五四丁表六行目)

⑧向南方不動坐^ヲ、示^シ当座成覚之効験^ヲ、誕^ニ東隅^ニ、不変身^ニ、彰^ニ現身作仏之教力^ヲ。(第五末 三〇丁裏二行目)

(4)「表」字で表記された例

⑨自^レ顯^シ大慈之高^ク時^ヲ、巨海之及^ブ祠^ノ宇^ニ也。暗^ニ表^ス弘^ニ誓之深^ニ湛^ニ。(第二末 八九丁裏五行目)

⑩東大寺ハ常在不滅、実報寂光ノ生身ノ御仏ト思食准^テ、釈尊初成道ノ儀式ヲ表^シ、天平年中ニ聖武天皇思食立^テ、高野天皇、大炊天皇、三代ノ聖主自^ラ精舎ヲ建立^シ、仏像ヲ治鑄シ奉^リ給^フ。(第二末 一一二丁裏八行目)

⑪慈尊院ヨリ御影堂ノ北ニ至ルマデ、百八十町ニ図居^ヲワル。台藏界ノ万陀羅ノ百八十尊ヲ表^シタリ。(第三本 五七丁表九行目)

〔他に用例あり。第三末二丁裏三行目 同二丁表一行目 第五末三一丁裏六行目〕

以上示したごとく、「アラハス」の表記には、全片仮名表記、「顯」字表記、「表」字表記が認められる。⁽⁴⁾このうち、最も用例数が多いものは、「顯」字表記である。但し、「表

ス」には、『延慶本平家物語』中に次のようなサ変動詞の例も認められ、全て「ヘウス」の如く読まれた可能性も存する。

⑬秋ノ象ノ空ニチル、会者定離ノ相ヲ表スレドモ尚シ生死流転ヲバノガレズ。(第六本 五五丁表四行目)

(2) 「アラハス」の各表記と意味との関わり
さて、ここでそれぞれの表記と「アラハス」の意味との関係について検討しておくこととする。

A 全片仮名表記について

全片仮名表記は、韻文中や散文の会話文中のみに認められ、地の文には認められないという特徴が存する。

①の用例は、「五月闇の中で、(頼政が鶴をみごとに射落として) 高名になった今夜であることよ。」という文意であり、ここでの「アラハス」は、「世間に知られるようにする」という意味で使用されている。②の「忠ヲアラワシ」とは、「忠義の心を示し」という意味である。また、③の「名ヲアラワス」とは、「名前を明記する。」という意味である。①②③の「アラハス」の意味は、それぞれ若干異なっているようであるが、「他人に知られるようにす

る」という点では共通していると考えられる。

尚、用例①②③の対象は、①「名」②「忠」③「名」である。これらの対象を、仏教と関わるか否かという観点から分類すれば、全て仏教とは関わらない方に属する。また、これらは全て不可視的抽象物である。

B 「顕」字表記について

ここで、「顕」字で表記された「アラハス」の意味を考えるにあたり、まず、それぞれの用例における「顕ス」の

対象を示しておくこととする。

表一に示した「顕ス」の対象を、仏教と関わるか否かという観点から、分類すると次のようになる。

(1) 仏教と関わらない対象

- a、物品―ハガネ（2例）、腰刀、文
- b、風景、様子―鷲峯山の梢、大義の高く峙つこと
- c、音楽―万秋楽
- d、事件―不調なる事

(表一)

対 象	用例の所在	対 象	用例の所在	対 象	用例の所在
盛者必衰の理	第一本九丁表三行目	親	第二本六六丁裏一行目	花蔵界の作法	第三本五十七丁裏二行目
ハガネ	第一本一八丁表三行目	宿意	第二本一三三丁裏一行目	元応	第三本八十八丁裏五行目
腰刀(サシアラハス)	第一本二〇丁表七行目	鷲峯山の梢	第二本二四丁裏一〇行目	志	第三本九一丁表二行目
面像(キザミアラハス)	第一本四二丁表八行目	義	第二本五四丁表五行目	ハガネ	第五本六丁裏四行目
形像(キザミアラハス)	第一本八六丁表二行目	大義の高く峙つこと	第二本八九丁裏四行目	花蔵界の作法	第五本三一丁裏一〇行目
不調なる事	第一本九三丁表六行目	不動明王像の写し等	第三本三〇丁表四行目	神通	第五本三九丁表九行目
万秋楽	第一本五六丁表二行目	浄土の莊嚴	第三本五四丁裏九行目	政代の恵	第五本四四丁裏一〇行目
本地	第一本八九丁表八行目	大師の遺跡	第三本五七丁表四行目	来迎の聖容	第五本四七丁表一〇行目
文(カキアラハス)	第一本九五丁裏二行目	都卒の摩尼殿	第三本五七丁表七行目	感応	第六本五六丁裏四行目
霊像(ウツシアラハス)	第二本三一丁表二行目	万陀羅の三十七尊	第三本五七丁表一〇行目		

e、心情——親、宿意、志

f、抽象的概念——盛者必衰の理、義、政代の恵

(2) 仏教と関わる対象

g、物品——都卒の摩尼殿

h、仏像、仏絵——画像、形像、靈像、不動明王像の写し

等、万陀羅の三十七尊、来迎聖容

i、風景、場所——浄土の莊嚴、大師の遺跡

j、仏教の作法——花藏界の作法 (2)

k、抽象的概念——本地、元応、神通、感應

以上示したことから、「顕ス」の特徴を、対象の観点からまとめると次のようになる。

(1) 「顕ス」は、仏教に関わるものと関わらないものいづれをも対象に取り得る。

(2) 「顕ス」は、「物品」のような可視的具象物と「心情」のような不可視的抽象物のいづれをも対象に取り得る。

ここで、若干の具体例を挙げて、「顕ス」の意味を検討する。

① 推古天皇ノ御宇、聖徳太子十七箇条憲法ヲ作給テ、世ノ不調ナル事ヲ顕シ給シカドモ、大方ノ禁許ニテ、当代ノ御煩ニ非ザリキ。(第一本九三丁表六行目)

(聖徳太子が、十七箇条憲法を制定して、世の整っていないことを明らかにしたという文意である。この場合の「顕ス」は、不分明な状態にあるもの(ここでは世の中の状態)を、形にし明確にし他人に分からせるという意味である。)

② 抑高雄者、山堆而顯^{ハシ}鷲峯山之梢^{ツツ}、谷禪^{シチ}而敷^ケ^テ商——山——洞之苔^{ツツ}。(第三末二四丁裏一〇行目)

(高雄山は高く、その様子は恰も鷲峯山の梢のようであるという文意である。この場合の「顕ス」は、見えないものを、眼前に表出させるという意味である。)

③ 宣^下知^下神——社仏——寺諸——司諸家、及五畿七道諸——国^ニ、顯^シ不動明王像写、尊勝陀羅尼摺——写図——写、体——數遍——數^ヲ、只任其力之堪否^上。(第三本三〇丁表四行目)

(諸国の神社仏寺等に下知して、多くの不動明王像写、尊勝陀羅尼摺写、図写を書き表して、其力に頼りなさいという文意である。この場合の「顕ス」は、「絵に書いて見えるようにする」という意味である。)

④ 菅家昔被遷鎮西^ニ給時、一句之詩ヲ詠ジテ其志ヲ顯シ、源氏ノ大将ノ駅ノ長ニ孔子ヲ待ケムマデモ思遺レテ、人々感涙難押^上。(第三末九一丁表二行目)

（菅氏が、鎮西に移されたとき、一句の詩を詠んで、心境を明らかにしたという文意である。この場合の「顕ス」も、不分明な状態にあるもの（ここでは「志」を、形にし明確にし他人に分からせるという意味である。）

⑤ サレバ、菩薩ノ得無生忍、猶古郷ニテハ難シ顯於神通^一。（第五末三九丁表九行目）

（無生法忍を得た菩薩であっても、人の多く住む古郷では、その神通を示し表すことは困難であるという文意である。この場合の「顕ス」は、「人の眼前に示す」という意味である。）

以上、用例を挙げ、「顕ス」の意味についてそれぞれ検討してきたが、それを要すれば、「顕ス」の意味は、「不分明なもの或は見えないものを、人に分かるように示す」ということになる。先に、小論の筆者は、「アラハス」の意味が、「不分明であつた有情物・無情物を、他人に知られるようにする。」であることを指摘したが、『延慶本平家物語』中の「顕ス」の意味も、これと同じであると考えて大過なからう。

C 「彰」字表記について

先に示した用例⑦の「遂ニ立^ニ新^一功^ヲ、彰^{ハシ}譽於四方^ニ」

とは、「遂に新たな勲功を挙げ、名譽を四方に知らしめた。」という文意であり、ここでの「彰ス」は、「世間に知られるようにする」という意味である。用例⑧は、「弘法大師は、東隅の国に生まれ、身を仏に変えず、現身作仏の教力を示す。」という文意であり、ここでの「彰ス」は、「人の眼前に示す」という意味である。このように、「彰ス」も「顕ス」と表記された「アラハス」と同じ意味で用されていると思われる。尤も、「彰」字「顕」字という別字を使用しているということは、そこに何らかの意図があると考えるのが妥当であろうが、小論の筆者は現段階では両表記が認められる要因を見出だしていない。

尚、用例⑦⑧の対象は、それぞれ⑦「譽」⑧「現身作法の教力」である。これらを、仏教と関わるか否かという観点から分類すれば、⑦「譽」は仏教とは関わらず、⑧「現身作法の教力」は仏教と関わるということになる。

D 「表」字表記について

「表」字表記の例については、「ヘウス」の如くサ変動詞に読まれた可能性の存することは、先に指摘したところである。前掲の用例⑨の「暗ニ表^ス弘誓之深湛^ヲ」とは、「暗に弘誓の深遠なることを示している」という意味である。用例⑩の「釈尊初成道ノ儀式ヲ表シ^シ」とは、「釈尊初

めて成道の儀式を人々の眼前で行い」という意味であろう。

用例⑪の「台藏界ノ万陀羅ノ百八十尊ヲ表シタリ」とは、

「台藏界万陀羅の百八十尊を絵に書き表した」という意味である。これら用例⑨⑩⑪の「表ス」も、「不分明なもの

を人に知られるようにする。」(用例⑨)「人の眼前に示す」

(用例⑩⑪)のように、「顕ス」の項で考察した「アラハ

ス」の意味と変わらない。ここでも、ことさら「表」字を

使用した意図は今のところ未詳である。次に示すように同

じ文脈で、「顕ス」「表ス」を併用している例もある。

・金堂ハ都卒ノ摩尼殿ヲ顕ハシテ、間ノ数四十九間也。

慈尊院ヨリ御影堂ノ北ニ至ルマデ、百八十町ニ図居ヲ

ワル。台藏界ノ万陀羅ノ百八十尊ヲ表シタリ。御影堂

ヨリ奥院ニ至ルマデ、三十七町ニ別テリ。金剛界ノ万

陀羅ノ三十七尊ヲ顕ハセリ。(第三本 五七丁表七行

目)

尚、「表ス」の対象を、仏教と関わるか否かという観点により分類すると次のようになる。

(1) 仏教と関わない対象

a、心情—呪咀の心

b、事柄—白沢の潔き事

(2) 仏教と関わる対象

c、仏像、仏絵—台藏界の万陀羅の百八十尊、胎藏界

の曼荼羅百八十尊の図会

d、仏教の作法—成道の儀式

e、抽象的概念—弘誓の深湛

このように、「表ス」の対象は、仏教と関わるものもあれば、仏教と関わないものもある。仏教と関わない対象の中には、「呪咀の心」のような不可視的抽象物も含まれている。

三、「現ス」の読みの検討

ここで『延慶本平家物語』における「現ス」について、これを「ゲンス」と読むか「アラハス」と読むかについて、主語と対象の観点から検討することにする。先に示した、「現ス」の用例につき、それぞれの対象を表にまとめると表二のようになる。ここでは、参考のために主語をもあわせ示した。尚、「現ス」には、対象を取らない、所謂自動詞的な例が存する。このような例は、表二の中で、対象の部分空欄にして示した。

表二のうち、第三末二六丁裏三行目と第五末四三丁表五行目の例は、主語と対象を判断する上で、若干の問題が存する。以下、用例を掲げて問題点を指摘しておくこととす

(表二)

主語	対象	用例の所在	主語	対象	用例の所在
地主権現	虚仮ノ相	第一本一三丁表二行目	弘法大師、釈迦如来	即身成仏の理証	第三本五三丁表九行目
重盛の子	尾籠	第一本五八丁裏二行目	弘法大師	五仏ノ宝冠	第三本五四丁裏七行目
日吉山王		第一本八九丁裏一〇行目	天変		第三本三三丁表七行
天道	九曜の形	第一末一二丁表五行目	天変		第三末六丁表二行
発願の文	光明	第一末七八丁表八行目	(薬樹王ノ身)		第三末二六丁裏三行目
発願の文	光明	第一末七八丁表一〇行目	歌		第三末五五丁表七行目
大師		第二中八丁裏九行目	白髪ノ老翁		第三末七四丁裏一〇行目
平家	臆病	第二中五七丁裏六行目	(来迎ノ尊容)		第五末四三丁表五行目
目一付タル物、長ケ一丈バカリナルモノ		第二中一一五丁表七行目	除病ノ色像		第五末四七丁表一〇行目
文学	風波ノ難	第二末三三丁裏一〇行目	弥陀	出家ノ形	第六末四九丁裏一〇行目
忠清	不覚	第二末九八丁表一行目	日吉山王		第一本九〇丁表九行目
多門天、持国天		第三本四六丁表九行目	観音ノ御変化		第一末一〇三丁裏七行目
釈迦弥勒		第三本四六丁裏三行目			

る。

① 観音^ニ現^ス薬樹王^ノ之身^ヲ。寧^ニ不^シ食^セ不^レ老^ニ死^ス之薬^ヲ乎。

(第三末二六丁裏三行目)

② 忽^ニ二赴^ニ弘^ニ眺^ニ之先路^ヲ、靈木有^テ靈童ハ無^シ。新^ニ現^ス満月之尊容^ヲ。(第五末四三丁表五行目)

①の例は、「観音ニ薬樹王ノ身ヲ現ス」とあり、構文上は、「観音」が場所を示す格助詞「ニ」を後接し、「薬樹王ノ身」が、目的格を示す格助詞「ヲ」を後接しており、

「葉樹王之身」は「現ス」の対象にあたる。しかしながら、文意は「観音に葉樹王の身が現われる。」と解釈されるところであり、「葉樹王之身」が「現ス」に対しての主語になると考えられる。従って、「葉樹王之身ヲ」の「ヲ」は未詳である。ここでは、文意から、「葉樹王之身」が主語であると判断し、表に示した。②の例は、「新ニ満月ノ尊容ヲ現ス」とあり、構文上は、「満月ノ尊容」が「現ス」の対象ということになる。しかしながら、この場合も、文意からは、「満月ノ尊容」が、「現ス」に対しての主語と判ぜられる。従って、「満月ノ尊容ヲ」の「ヲ」も未詳ということになる。

さて、ここで、表二に示した主語と対象をまとめると次のようになる。

A、自動詞的用法の場合

【主語】

(1) 仏教と関わない主語

- a、人物―白髪ノ老翁
 - b、化物―目付タル物ノ、長ケ一丈バカリナルモノ。
 - c、自然現象―天変（2例）
 - d、和歌
- (2) 仏教と関わる主語

- e、人物―弘法大師
 - f、仏神またはそれに類するもの―日吉山王（2例）・多門天・持国天・釈迦弥勒・釈迦如来・葉樹王ノ身・来迎ノ尊容・徐病ノ色像・観音ノ御変化
- B、他動詞的用法の場合

【主語】

(3) 仏教と関わない主語

- a、人物―重盛の子・平家・忠清
- (4) 仏教と関わる主語
- b、物品―発願の文（2例）
 - c、人物―弘法大師（2例）・文学
 - d、仏神またはそれに類するもの―地主権現・日吉山王・天道・弥陀

【対象】

(5) 仏教と関わない対象

- a、光―光明（2例）
 - b、武士にとつてあるまじきこと―尾籠・臆病・不覚
- (6) 仏教と関わる対象
- c、相・形―虚仮ノ相・九曜ノ形・出家ノ形
 - d、物品―五仏ノ宝冠
 - e、災難―風波ノ難（僧文学が祈祷によって生じさせよ

うとしたもの)

f、抽象的概念——即身成仏の理証

以上、「現ス」の主語と対象について、仏教と関わるか否かという観点から、分類を試みた。ここで「現ス」の主語について、その特徴を示せば次のようになる。

1 「現ス」の主語となりうる語は、仏教と関わるものもあれば関わらないものもある。

2 「現ス」の主語のなかで、特に仏神またはそれに類するものが多い。また、化物、怪物といった人間ではないものも存する。人物が主語になる場合は、僧侶と武士との二層に分かれる。

さらに、「現ス」の対象と、先に示した「顕(アラハ)ス」の対象とを比較して、その共通点、相違点を示すと次のようになる。

3 「現ス」「顕ス」いずれの対象にも、仏教に関係するものと関係しないものがある。

4 「顕ス」のみに認められる対象としては、風景・様子、音楽、事件、心情、仏像、仏絵、作法があり、「現ス」のみに認められる対象としては、光、武士にとってあるまじきこと、災難、相・形がある。

5 「現ス」「顕ス」に共通する対象は、物品、抽象的概念

(仏教に関係するもの)のみである。

右に示したいくつかの諸特徴から、「現ス」「顕ス」の主語・対象は、概ね区別されており、共通する語は極めて少ないといえる。特に、「顕ス」には、心情を対象にとる例が三例存するのに対して、「現ス」には、このような例が一例も認められないことなどは、注目される。それでは、「現ス」「顕ス」の主語・対象は、どのような基準を以て区別されているのであろうか。以下、「現ス」について、特に仏教と関わらない主語・対象に焦点を当て、用例を掲げながら、説明を加えていくこととする。

「人物を主語にとる場合」(白髪の老人・武士)

③白髪ノ老翁、御車ノ前ニ現シテ、イカニセムフヂノ末葉ノカレ行ヲタゞ春ノ日ニマカセテゾ見ル 是ヲ御覧ジテ、
「サレバ我イヅル事ヲバ神明ノ御トガメノアルニヤ。春ノ日トハ、春日ノ明神トゞメサセ給ヘトニヤ。イカッスベキ」ト思ワツラヒ給ケルニ(略)(第三末七四丁裏一〇行目)

(この例文中の「白髪ノ老翁」については、その素性が明かされていないが、「神明ノ御トガメ」とあることから判じて、おそらくは生身の人間ではなく、神仏の変化であろう。従って、この例は、「仏神またはそれに類す

るもの」の項目にあたる可能性が存する。)

④「凡ハ重盛ナドガ子供ニテアラム者ハ、殿下ヲモ重ジ奉リ、礼儀ヲモ存ジテコソ有ベキニ、無云甲斐 若キ者共召具シテ、加様ノ尾籠ヲ現シテ、父祖ノ悪名ヲ立ル不孝ノ至リ、独リ汝ニアリ。」(第一本五八丁裏二行目)

(右の例は、「重盛ナドガ子供ニテアラム者」が「現ス」の主語であり、「尾籠」がその対象であることから、主語・対象いずれも仏教とは、関係の無い語であるということになる。これに類する例は、他に「平家が臆病を現す」「忠清が不覚を現す」の二例が存する。その対象は、いずれも「尾籠」「臆病」「不覚」といった、武士にとつてあるまじき事柄である。このような種類の主語や対象をとる例は、「アラハス」には認められないものである。因みに、用例④の「現シ」を、「ゲンジ」と読むことは、覚一本の対応箇所で、「けんし」と平かな表記されていることから判ぜられる。ここで、注目されることは、この種の「現ス」の用例は、三例とも、会話文中に現れるということである。小論の筆者は、先の拙稿^⑤の中で、他の文献の例も考え合わせ、この種の「現ス」は、本来の意味用法とは異なるものであり、鎌倉時代以降に生じた派生的用法であつて、主として口頭語として使用された

ものであろうことを指摘した。)

「化物を主語にとる場合」

⑤月ノ光クマナケレバ、終夜詠メテ居給ヘルニ、坪ノ内ニ、目一付タル物ノ、長ケ一丈二尺バカリナルモノ、現タリ。(第二中一一五丁表七行目)

(右の例の主語は、「目一付タル物ノ、長ケ一丈二尺バカリナルモノ」である。これは、仏教とは関係が無い。生身の人間ではないという点では、仏神に類するものに準じて、この例を捉えることも出来る。)

「自然現象を主語にとる場合」

⑥二月廿三日ノ夜半ニ、犯^三大伯昂星^三。是旁以重変ナリ。天文要録云、「大伯昂星ハ、大將軍失国ノ境^二、四夷来、有^三兵起事^三」云へり。(一文略す) 彼辰旦国ニハ、玄宗皇帝ノ御宇^ニ此天変現シテ、七日内ニ天下乱キ。(第三末三丁表七行目)

(右の例の「現ス」の主語は、「天変」である。ここでの「天変」とは、「大伯昂星が現れること」である。「大伯昂星ハ、大將軍失国ノ境ヲ、四夷来、有兵起事」とある如く、この大伯昂星が天に現れることは、戦乱などが起こる不吉な前兆として考えられていたのである。不吉な事態を起こすものが、大伯昂星であると考えられていた

とすると、「天変」すなわち「大伯昂星が現れること」も、化物の類に準じて捉えることも出来るように思われる。）

〔和歌を主語にとる場合〕

⑦ 其中ニ惠光房津師、「抑此願書ノ趣、神慮ナヲモテハカリガタシ、願ハ權現其瑞相ヲ示シ給ベシ」トテ、山王ノ御宝前ニ捧テ、三日參籠シタリケルニ、願書ノ表紙ニ一首ノ歌現シタリ。不思議ニテゾ侍ケル。（第三末五五丁表七行目）

（右の例の「現ス」の主語は、「一首ノ歌」である。この歌は、惠光房津師の願によつて出現したものであるから、仏教に關係するものとも考えることも出来る。また、「不思議ニテゾ侍ケル」とあることから、単なる歌ではなく、不思議な現象という点では先の用例⑤⑥「化物」「大伯昂星」にも通ずるものである。）

〔光を対象にとる場合〕

⑧ 太原ノ白居易、文集七十卷ヲ二部書テ、一部ヲバ鉢頭院ノ宝藏ニ納メ、一部ヲ巴南禪院ノ千仏堂ニ送奉リテ、其後件ノ文集ノ箱ヨリ光明ヲ現ル事度々也。両院ノ寺僧怪ヲ成テ、文集ノ箱ヲ開テ見所ニ、第六十ノ卷ニ發願ノ文アリ。其一二ノ文字ヨリ現ル所ノ光明也。（第一末七

八丁表八行目）

（右の例の「現ス」の主語は「發願の文の文字」であり、対象は「光明」である。この文字から發せられた光明も、仏力とおぼしき作用によつて生じた不思議なものであり、仏教に關係するものとして捉えることも可能である。）

〔災難を対象にとる場合〕

⑨ イカニ道理ヲ責レドモ、文学ガ状ヲ信用シ給ワヌ事ノアサマシサニ、信ヲモトラセ奉リ、法ヲモ悟ラセ給ヘカシトテ、方便ノ為ニ、小龍等ヲ招テ、風波ノ難ヲ現シテ候ツルゾ。（第二末三三丁裏一〇行目）

（右の例の「現ス」の主語は、「文学」であり、対象は「風波ノ難」である。「風波ノ難」は、僧文学が小龍を招き寄せることによつて生じさせるものであり、これもまた仏教と關係があるものとして捉えることが可能である。）

以上、用例を揚げながら、「現ス」の主語と対象に關して、特に一見しただけでは仏教とは無關係であると思われる例について検討を加えてきた。その結果、一見仏教とは無關係に思われる主語・対象であっても、その文脈を吟味すれば、実は多くの場合、仏教と關係が存することが判明

した。但し、武士が不覚や尾籠を生じる場合で使用される「現ス」に限っては、これに当てはまらない。しかしながら、このような例が、「現ス」の派生的な用法であると考へれば、ほとんどの「現ス」の主語・対象が仏教と関係しているということになる。また、仏教と無関係の主語・対象の場合も、「化物」「大伯昂星」といった、不思議なものに限られていた。要すれば、「現ス」は、仏教と関係のある主語・対象（仏神、僧侶等）を中心に人力の及ばぬ不思議な現象を主語・対象とするということになる。また、これらの主語・対象は、全て可視的であるという特徴も合わせ備えている。「アラハス」が、多くの生身の人間を主語にとり、「心情」「隠し事」といった不可視のものを対象にとることと比して、「現ス」「アラハス」には、意味用法上に大きな違いが存する。

本稿の冒頭で、先の拙稿⁽⁶⁾の中で、「ゲンス」の特徴について指摘したことを、いくつかまとめた。これと、今回の結果とを比較すれば次のようになる。

(1)『延慶本平家物語』中の「現ス」が、仏教と関係する場合にのみ使用されるという点で、先の論考の結果と一致する。

(2)「現ス」は、可視的な主語・対象に限って使用されるの

に對して、「アラハス」「顯ス」「彰ス」「表ス」が、「心」など實際に見ることができない主語・対象にも使用されるという点で、先の論考の結果と一致する。

さて、このように、先の拙稿の結論と、本稿で検討した『延慶本平家物語』中の「現ス」の特徴とを比較すれば、当該文献中で「現ス」と表記された全ての例は、拙稿に示した「ゲンス」の特徴と合致していると考えて、矛盾しないということになる。したがって、『延慶本平家物語』において、「現」字で表記されたものは、全て「ゲンス」と読むと考えられるのであって、「アラハス」は、「ゲンス」と區別して、片仮名で表記されたり、「顯」「彰」「表」字で表記されているというのが、本稿で導きだした結論である。

四、諸本⁽⁷⁾との比較

さて、ある資料中の漢字の読みを判断するには、先に述べたような意味の側面から検討する方法の他に、諸本の対応箇所を比較する方法も有効である。ここでは、参考の為に、『延慶本平家物語』で「現ス」が使用されている部分につき、諸本の対応箇所との比較をしておくこととする。これを、表にまとめれば、表三のようになる。

(表三) 『平家物語』 諸本の対応箇所比較表

延慶本平家物語	覚一本	屋代本	百二十句本	両足院本	八坂本	長門本
①	けんして(上120・6)					現し候べきとて(卷一9ウ7)
②						現して(卷一71オ9)
③						
④	けんしつ、(上149・10)	現シツ、(67・6)	現シツ、(87・7)	現ツ、(二・10オ4)	現して(47下左7)	現して(卷二67オ2)
⑤						
⑥						
⑦						
⑧						
⑨						
⑩						
⑪						
⑫	けんして(上414・15)			変入(46オ)		
⑬						
⑭						
⑮	けんし(下300・13)					
⑯						
⑰						
⑱						現ス(卷十三43オ2)
⑲						
⑳						
㉑						
㉒						
㉓						
㉔						
㉕						

(空白部分は、対応箇所の無いことを示す。)

表三は、計七点の『平家物語』諸本の比較を示したものである。表三を見ても分かるように、諸本の該当箇所から延慶本の「現ス」の読みが判ぜられる部分は、決して多いとは言えない。ただし、諸本のうち、覚一本は、全て「現ス」の部分が平仮名表記であるため、延慶本の読みを決定するための参考となる。覚一本で延慶本との対応箇所が認められる部分は四箇所であり、全て「ゲンス」という語が対応している。勿論、これだけでは、延慶本の「現ス」の全ての読みを決定することは出来ないのであるが、少なくとも対応箇所で「アラハス」が使用されていないことは注目される。先に意味の面から、延慶本の「現ス」の読みを検討したが、その結果は、諸本の対応箇所による検討からも、若干裏付けられることになる。尤も、唯一、両足院本に「現」字に対して「アラハシ」の振り仮名が認められることは、覚一本では、この対応箇所が「げんじつ」とあることからしても、尚疑問が残るところである。この例については、現段階では未詳であると言わざるをえない。両足院本の、「現」字、「顕」字の使用状況を検討する必要があるが、今後の課題としたい。

ま と め

以上、本稿では、『延慶本平家物語』で「現」字表記されたものを、「ゲンス」と読むかそれとも「アラハス」と読むかという疑問に端を発し、全用例に基づいて検討を加えてきた。その結果、「現」字表記されたものは、「ゲンス」の特徴を備えており、したがって全て「ゲンス」と読むのが適当であるという結論を導きだした。今回は、一文獻に限っての考察であったが、今後他の文獻についても検討を加えて行く必要がある。また、漢語サ変動詞であるか和語動詞であるかが、その活用により紛らわしくなるものは、他に「奏ス」「ソウス」と「マウス」「啓ス」「ケイス」と「マウス」「施ス」「セス」と「ホドコス」等があり、これらについても今後の検討課題としたい。

【注】

(1) 「平安・鎌倉時代における「現ス」「アラハス」「アラハル」についての一考察」(『鎌倉時代語研究第十七輯』平成六年五月三十日発行)

(2) 「現」字を、「ゲンス」の如く漢語サ変動詞として読み得ることは、前田本『色葉字類抄』に「現」字に対して「ゲンス」の読みが掲載されていることから明らかである。さ

らには、延慶本と覚一本とに比較により、延慶本で「現シテ」とあるところを、覚一本で「けんして」と平かな書きされていることから、証明し得ることである。(表三『平家物語』諸本の対応箇所比較表を参照) また、延慶本中にも、「ゲンス」と読んだことが、送り仮名から知られる例の存することは、本論文中に示したところである。

尚、「ゲン(現)ス」は、連濁により「ゲンズ」の如く「ス」が濁音化していたことも十分考えられるところであるが、小論の筆者は、その確例を未だ見出だしていないので、本稿では、「ゲンス」の表記に統一することとした。

(3) 用例は全て、『重要文化財 大東急記念文庫蔵 延慶本平家物語』(汲古書院 昭和五十八年一月発行)により検索したものであり、各用例の所在は、当該文献に基づいたものである。

(4) 「現」「顕」「彰」字がそれぞれ「アラハス」と読み得ることは、次のような古辞書の記載から知られる。

(前田本色葉字類抄 卷下三七丁表4行)

顯	アラハス	彰	音章	露	ロ	現	保	著	姓
呼典反				呈直真反				著	姓
アラハル								問	姓
表	出也	程	效	標	題	租	陽	詔	驗
破鏡反									
數	公	又	アラハニ	形	見也	暴	晶	察	覺
	又	アラハニ							
置	儀	瓢	属	暝	題	許	坦	微	微イ本
									見

爽 讚 序 曝^{式反} 勳 章 宣 旌^{上顯也}

(観智院本類聚名義抄)(声点略す)

現 アラハス
ウツ、ナリ ミル(佛中八四)

顯 呼孫反 アラハ爪^{ミル}
ニ二 アキラカナリ 禾ケム(佛下本三〇)

彰 一章 アラハス アキラカニス
ホカラカナリ カタクナ (佛下本三二)

表 方少反 ウヘ ホカ マウス 下言
ウハオソレ アラハス オ上書 タ、シ 禾ヘウ(法中二三六)

(5) 注(1)の論文。

(6) 注(1)の論文。

(7) 平家物語諸本は、次の文献に拠った。

- ・覚一本『日本古典文学体系』(岩波書店)
- ・屋代本『屋代本平家物語』(佐藤謙三、春田宣編 桜楓社 昭和四十八年八月一日発行)
- ・百二十句本『百二十句本平家物語』(斯道文庫固定叢書刊之二 汲古書院 昭和四十五年一月発行)
- ・両足院本『両足院本平家物語』(伊藤東慎、大塚光信、安田章共編 臨川書店 昭和六〇年四月二五日発行)
- ・八坂本『八坂本平家物語』(山下宏明編 大学堂書店 昭和五十六年六月八日発行)

・長門本——『伊藤家藏門本平家物語』（石田拓也 汲古書院
昭和五二年五月発行）